







하하

진진진  
진진

진진





Me

おっおっおっおっおっおっ  
おっおっおっおっおっおっ  
おっおっおっおっおっおっ  
おっおっおっおっおっおっ  
おっおっおっおっおっおっ  
おっおっおっおっおっおっ  
おっおっおっおっおっおっ

おっおっおっ

おっおっおっ

おっおっおっ

おっおっおっ





アハハハハ

アハハハハ















「ここで野営をしよう」

とある目的を果たすための旅路、私達は野営地を見つけたのでそこで夜を過ごすことにした。火を焚いて食事を作る、そしてそれらが終わりは後は身体を休めるだけになってから、私：シオンは着ている服をその場で脱ぐ。隣では仲間のリンウエルもさも当然とばかりに服を脱いでいる。当たり前前の光景なので何もおかしい事は無く、他の仲間達も何も言わない。

「今日の『当番』は私からだったわね」

私は目の前に座っている男：ご主人様に言う、私達のととても大事な仲間だ。不思議と何でも言う事は聞いてあげたくなってしまうこの人がいつから仲間になったのかはつきりしないのだが、それでも大事な仲間なのは間違いない。





「あっ、あっ、ああんっ！」

いつものようにこの人に跨る。はしたない声が出てしまうのが少し恥ずかしいが腰を動かすのは止めない。  
なぜならこの身体を使って奉仕するのは当然の事だからだ。

「それで次は何処へ行くんだ？」

「そっ、そうね、あっ！次のっ、目的地はっ！ああんっ！」

他の仲間達が話し合いを始めたので私もそのままの状態で会話に混ざる。これも当たり前前の事なので誰も何も  
言わないし思わない。思っ**て**はいけない。





「おいおい無理するなって、こっちはいいからその人とのご奉仕セックスに集中してるよ」

快感で満足に喋れない私に対して、焚火の反対側に座っている仲間の一人が苦笑を浮かべながら言う。その彼の瞳はどこか焦点があっていない。

「そ、そうねそうさせてもらうわ、あんっ、」

いけない、奉仕に集中しなくては……。チラつと横を見ると次の番であるリンウエルが甘弄りでオナニーをしていた。最近私もよくオナニーをするようになった。まあ、**野外でオナニーをする事は何にも恥ずかしい事ではない**というの**は当たり前前の常識なのだ**が。この間もこの人をお願いされてリンウエルと二人並んで立ちながらオナニーをして派手にイってしまった。





「あつ、あつ、あつ！イク、イク……！ああん……あ、イクツ……！！！」  
全身でイってしまった私に合わせて中出しされてさらに絶頂してしまう。

「はあ……はあ……」

中出しが終わるとこの人の上から降りる、これで私の番は終了だ。続けてリンウエルが奉仕に入る。  
これは毎晩行われている光景。何にもおかしくない、冒険の旅の光景としては当たり前前の事である。

(……あら？私には呪いが……呪い？呪いってなんだっけ……？まあどうでもいいわね……)

私は何か**大事な事を忘れて**いるような**違和感**を感じつつも、また明日からの旅路のために快感の余韻に浸りながら身体を休める事にしたのだった。









